慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西脇順三郎没後40年記念展「フローラの旅」：インクルーシヴ鑑賞ワークショップを振り返って
Sub Title	Report and review on the inclusive art appreciation program for the exhibition : Introduction to Art archive XXIV : the 40th anniversary of the death of Junzaburo Nishiwaki : Wandering with flora
Author	吉岡, 萌(Yoshioka, Megumi)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.30 (2022/23), ,p.185- 196
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要2022
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000030-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西脇順三郎没後 40 年記念展「フローラの旅」── インクルーシヴ鑑賞ワークショップを振り返って

吉岡　萌
学芸員補

はじめに

2022 年度、慶應義塾大学アート・センター（以下、KUAC）では、NPO 団体「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」協力のもと、インクルーシヴ関連イベントを計 4 回実施した。前年度には他館での取り組みについて簡単なヒアリングを行ったが、KUAC としての実施は本年度が初めての試みであった。

そこで本稿では、2023 年 1 月 16 日から 3 月 17 日まで開催された展覧会「アート・アーカイヴ資料展 XXIV：西脇順三郎没後 40 年記念展『フローラの旅』」（以下、西脇展）[*1] に伴い、企画・実施されたインクルーシヴ鑑賞ワークショップ（以下、西脇展 WS）を中心に取り上げたい。なお、紙幅の都合上、同時期に開催した東京海洋大学でのワークショップ[*2] や増上寺でのトーク・イベント[*3] についての詳細な記録は、別の機会に譲ることにする[*4]。

上記 2 つのプログラムは学外の機関で行われたものである。一方、西脇展 WS は学内で実施され、その内容も詩人・西脇順三郎を取り上げた本展覧会に紐づいたものであった。初めての試みであったことや勉強不足から、多数の反省と課題が残されている一方、散歩や詩といったテーマを中心に扱った本プログラムが、意欲的な取り組みとなったことも確かである。

近年、インクルーシヴ・プログラムに対する世間一般の興味関心は増加傾向にある[*5]。とはいえ、このようなワークショップの事例紹介はまだ数が少ないといってよいだろう。こうしてワークショップに至るまでの過程を記録することで、参加者にとってより充実したワークショップをだれもが開催できるようになることを期待する。よって、本稿ではまず、キックオフの事前打ち合わせから本番終了後の反省会まで、ワークショップ実施全体の流れを詳細に記録する。そのうえで、今回の成果と課題を整理し、今後の新たな取り組みの際にも参照できるものとしたい[*6]。

1.「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」との協働の経緯

2012 年 6 月に発足した NPO 団体「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」（以下、「とつくる」）は全国の美術館や学校で美術鑑賞を行うプログラムを実施している。「とつくる」が実施するワークショップでは、スタッフの目の見えない人と見える人がナビゲーターとなり、全員で作品を鑑賞しながら、見えることや見えないことを言葉にしていく[*7]。

KUAC では 2021 年度より、文化機関へのアクセシビリティ

を巡る社会的課題の把握と解決を狙いとし、「アクセシビリティ検討ワーキング・グループ」を計3回に渡り実施した[*8]。そして、このワーキング・グループの第3回では「とつくる」の代表である林健太氏と、メンバー（当時）である中川美枝子氏へのヒアリングを行った（筆者は不在）。そこでKUACは「とつくる」が実施するワークショップを実際に体験しつつ、現状の課題の把握に努めた。

こうしたヒアリングを踏まえ、本年度、KUACは「とつくる」と本格的に協働してインクルーシヴ鑑賞ワークショップを実際に開催するに至った。西脇展WSに先んじて開催され、KUAC初主催となったプログラム「マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ＆ぶらぶら対話ツアー」［2023年2月4日（土）、東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム］（以下、東京海洋大学WS）での反省を踏まえつつ、西脇展WSは2023年2月及び3月の計2回に渡って実施された。

2. 準備過程の記録：読書／詩を読む編に至るまで

詩人・西脇順三郎（1894-1982）は慶應義塾大学で学び、英文学への関心から英国へと留学する。帰国後は慶應義塾大学ほかで教壇に立ちながら、詩人・評論家として活躍したが、今日では同時代の詩人と比較して知名度が高いとはいえない。また、ともすればその詩は難解と思われがちだが、本展では「散歩」と「フローラ（植物）」という2つのキーワードを設定し、詩人の親しみやすい側面にクローズアップした。

これらのキーワードは西脇の詩作プロセスの重要な要素でもある。教鞭を執っていた三田周辺をはじめ都内各所を詩人は歩いた。そして、ふと目にした草花に心を寄せては、時にその名前をメモ帳に書き留めたり、押し花にして収集したりすることで、自身の詩のなかに落とし込んでいたのである。

本展では、植物の名前や散歩といった要素が登場する西脇の詩稿や、様々な音や言語への関心がうかがえるノート、詩人がかつて使用していた植物図鑑や押し花帳を展示した。この経験、西脇順三郎研究会による詩の朗読を流し、展示室外にも散歩する西脇の映像や写真を展示した。以上のように、本展は作品を見るだけでなく、会場を歩いたり、音を聞いたりすることでも作品を楽しめるようにつくられた。

人々にとって身近なテーマを扱った本展は、昨年のワーキング・グループでの成果を生かし、ワークショップを初めて実践するのに適切であると思われた。筆者はかつて、アーティゾン美術館でのインターンシップの際、幸運にも「鴻池朋子 ちゅうがえり」展関連プログラム「みる誕生」鑑賞会の実施に関わる機会を得た[*9]。それ以降、インクルージョン／インクルーシヴ鑑賞ワークショップへの関心を持ち、本ワークショップにおいては、本展主担当の森山緑とともに、企画立ち上げから中心メンバーとして携わることとなった。

本節ではまず、西脇展WSの第1回「読書／詩を読む編」［2023年2月25日（土）］までに至る準備過程から実施までの記録を取り上げる。KUACでの実施は初めての試みとなることから、その内容や実施回数について慎重な議論が行われた。

(1) オンライン会議（Zoom）および対面による事前打ち合わせ

「読書／詩を読む編」の準備段階となるプレ座談会［2023年2月5日（日）］の実施までに、「とつくる」とKUACは計4回のミーティングを重ねている。

第1回目のミーティング（Zoom）は実施の半年以上前となる7月に実施された（筆者不在）。ここではまず、実施にかかる必要経費の調整を行いつつ、モノを触ることよりも言葉による対話を重視するワークショップの方向性を確認している。なお、この時点では、東京海洋大学WSや「インクルーシヴを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える」［2023年2月16日（木）、大本山増上寺］（以下、増上寺WS）の実施決定前であったため、当初の構想では西脇展WSは全4回の予定であった。

9月に行われた第2回目、第3回目のミーティングでは、詩人・西脇順三郎の基本情報やその詩の特徴、そして本展の構想を具体的に共有した。その後、ワークショップ全体のテーマとして次のようなポイントに注目した。(1) 難解と思われがちな西脇詩の面白さを知ってもらうこと。(2) 散歩のなかで見つけた野草の名前を詩作に取り入れていたこと。(3) 西脇が野草の名前や言葉の響きを重視していたこと。

上記のような西脇詩の音の面白さに注目するうえで、他館でのプログラム実施の経験もある俳優の方の協力のもと、当初は演劇の要素を取り入れたプログラムを全3回にわたり行う予定であった。しかしながら、スケジュールの都合により、今回は演劇の要素は入れず、2-3月に全2回で「読書」や「散歩」をテーマとしたワークショップを行うことを決定した。

また、「とつくる」協力とは別のプログラムとして、1月には「触察」について考えるワークショップを実施予定であった。しかしながら、西脇順三郎とは直接関係のないトピックであったことや、「触察」というテーマに対して検討

不足であることに加え、2月は既に過密日程となっていたため、今回の実施は見送ることとなった。

11月のミーティングでは、ワークショップの参加募集方法や具体的な実施内容について話し合った。当事者の意見も踏まえ、今回はGoogleフォームを使用することにした。また、作成したページについては、障害当事者のメンバーに確認してもらい、そのアクセシビリティをチェックすることになった。

実施内容に関しては、詩や本は持ち出し可能で携帯性がある＝散歩という行為とも親和性があることに着目し、第1回（「読書／詩を読む編」）のワークショップでは、詩をメールで事前配布し、詩の読み方や読む場所について聞いてみるということで一致した。また、詩人の大崎清夏氏らが参加した展覧会のアイデアに着想を得て[*10]、参加者が持ち帰ることのできる詩を配布するという案が出た。

この時点では、スケジュールの都合により「とつくる」メンバーとの話し合いの時間があまり持てていなかった。そのため、顔合わせの機会も兼ねて、読書全般について考える機会を持ちたいという意見が林氏から出た。そのため、本番に先んじてスタッフ間で読書について話す「プレ座談会」を2月に開催することになった。

(2) プレ座談会［2023年2月5日（日）］

11月のミーティングを最後に、2月のプレ座談会の開催まで西脇展WSに関する話し合いが進展することはほとんどなかった。というのも、展覧会自体の設営準備や、先立って実施することになった東京海洋大学WSの開催準備に想像以上に時間がかかり、西脇展WSに取り掛かることが出来ていなかったのである。後述するが、こうしたスケジュール管理や見通しの甘さも、今回の大きな反省のひとつである。

図1 「プレ座談会」の様子

よって、この座談会は東京海洋大学WSの翌日、2月5日（日）に、KUACの会議室とZoomのハイブリッド形式により行われた（図1）。まず、実際に来館したメンバーとは西脇展を鑑賞した後、「とつくる」林氏から、会の目的を共有してもらった。第一に、読書や散歩について考える会ではあるものの、最終的には西脇展に繋がる内容を目指すこと。第二に、目の見えない人や見える人（本番においては耳の聞こえない人も）が安心して語り合えるような場づくりをすることである。また、この会には慶應の学生に加え「とつくる」スタッフの学生も参加しており、若者が主体となって話し合いが進められるような場づくりが行われた。

ここではまず、「いつ、どのように読書をするのか」について、それぞれの方法や意見を共有した。点字や音声読書、倍速視聴や読書との出会い方といったテーマも話題にのぼったが、「読書／詩を読む編」へと最も繋がったものは「詩をどうやって読むのか」というテーマであった。

この話題では、見える人からは、書き込んだり色を塗ったりしながら読んだり、音読のように口に出して読み上げたりしたいとの声があがった。一方、見えない人からは、詩は紙に点刻された点字で読み、そのレイアウトも味わいたいという意見が出た。しかしながら、独特の字下げやレイアウトが点字では再現されていない場合や、小説『アルジャーノンに花束を』内のギミックのように、漢字からひらがなへの変化は点字では分からない場合もあるという。こうした状況に遭遇した際には、コンピューターに読み込ませて漢字を調べることもあるとのことであった。

以上のような対話を通して、これまでたずねる機会のなかった各自の読書体験や、詩を読む際の着眼点の多様さに気付かされた。そして、ここで出た「詩との出会い方、読み方」というテーマは「読書／詩を読む編」でも問いかけてみることになった。

また、ここでは3月に実施予定の散歩編に向け、日常生活での散歩や買い物についても意見を交換しあった。ある見えない人は、普段はネットスーパーでの買い物が多く、一人で知らない場所を歩くのはハードルが高いと話していた。知らない場所に行く前には道の手がかりを覚えていかねばならず、場合によっては、見えない人は白杖を持っているというだけで、入店を断られてしまうことすらあり、見えない人や見えにくい人にとって散歩は非常に難しいという。

さらに続けて、店員さんに付き添ってもらい買い物をすることはあるが、そうすると偶然なにかと出会う機会がなく

なってしまうという話も出た。こうした「みんなで偶然性を伴った散歩をしてみたい」という話題が3月の「散歩編」へと繋がっていった。

「プレ座談会」ではワークショップの内容を相談するというよりは、雑談のように様々な話が現れては消えていった。しかしながら、これらの会話のなかには普段のミーティングだけでは分からない日常生活にも関わるような非常に重要な手がかりがたくさん含まれている。したがって、本座談会は、見えない人と見える人がともにワークショップの根幹的なテーマを設定するための貴重な機会となった。

(3) 直前ミーティング

そして、「プレ座談会」での話し合いを基に、2月15日、17日に直前ミーティングを行った。ここではまず、参加者数の最終的な決定と当日のスタッフ配置について確認を行った。当日、プログラム内では展示を鑑賞する時間を十分確保できず、展示室を開室することになったが、そのためには監視の人員が必要である。また、同伴者のいない見えない人が駅からKUACまでの送迎や、展示室でのガイディングを希望する場合にはさらに追加の人員が必要となるが、この点については開催直前での調整となってしまった。

また、このミーティングでは、詩人・西脇順三郎についての展覧会とワークショップの繋がりを確保するため、改めてキーポイントとなる以下の3点を確認した。

(1) 西脇順三郎という詩人を知り、その詩を味わってほしい。(2) 散歩で収集した花や音から新たな作品が生まれる、西脇の詩作プロセスについて知ってほしい。(3) 展示室で詩を読み、朗読を聞く時間の確保。

このように「読書／詩を読む編」では、「どのように詩を読むか」という根本的なテーマに立ち返り、参加者には自由に詩と向き合ってもらいながらも、同時に、最終的には詩人・西脇順三郎とその詩への理解にも繋がるような構成になることを意識した。

さらに、参加者に対し事前配布する詩3点について、それぞれのお気に入りを持ち寄りつつ、最終的には「茄子*11」「一月*12」「太陽*13」に決定した。選定のポイントは、なるべく短く、詩を読んだことがない人でも親しみやすいこと、朗読の中に含まれていること、なるべく展示室内に原稿が存在することである。

また、朗読に関しても様々な読み方の詩を選ぼうと試みたが、今回の朗読は元々低音の声質の男性が多く、選択肢が絞られてしまった。今後、同様に朗読を用意するならば、女性をはじめ様々な属性や読み方の朗読者がいた方が望ましいだろう。

図2　ワークショップで配布した「詩のおみやげ」

また、この3つの詩を用いて、以前アイデアが出た「詩のおみやげ」を配布することにした。プログラムの時間は限られているが、どこでも西脇の詩を読んだり、ワークショップを思い出したりしてもらえるようなものを配布したかったからである。A5サイズの紙の表側には詩の文章を、裏側にはYouTubeの朗読動画へと飛ぶQRコードとURLを掲載することで、目と耳どちらでも西脇の詩を楽しめるように意図した。また、点字ラベルを用いてQRコードの位置を示す工夫も行った（図2）。

3. 当日の実施内容：読書／詩を読む編［2023年2月25日（土）14：00–15：30］

本番当日、この日のプログラムの参加者は5名（見える人4名、聞こえない人1名）であった。また、KUACや「とつくる」スタッフに加え、手話通訳2名を依頼した。また、先述の通り、この日の12：00より1時間半程度、展示室を開室し、希望する参加者には事前に展示を鑑賞してもらった。

開始時にはイベントの趣旨説明と、進行の都合上、予定終了時間が20分程度押す可能性があることを伝えた。各自の自己紹介では、参加の動機や興味の幅は多様なようであった。

また、この日は手話を使って会話する参加者がいたため、発言をする際には出来るだけ挙手をするという簡単なルールを確認した。今回はこのようなルールを設けたものの、ふとした呟きはどんどん声に出して欲しいとの補足もあった。

プログラム前半、会議室では「とつくる」メンバーの見え

ない人が中心になり、進行を行った。まず、事前に送った3つの詩の印象について質問し、次に「どのように詩を読んだか」について聞くと、この日の参加者全員が目で読んだと答えた一方、スタッフの目の見えない人は2人とも音声で読んでいた。また、紙に印刷して読んだ人、パソコンやスマホの画面で読んだ人がおり、両者の違いについて、それぞれの意見や経験を共有した。詩が難解に感じられたスマホ派の人が言葉を検索しながら読んだというと、読書の途中でつい検索してしまう人たちからは共感の声が上がっていた。

さらに、詩を読んでいる時に「イメージが頭の中でどのように再生されるか」という問いに対しては、音声派と映像派に分かれた。目の見えない人の意見では、詩を読み上げる機械音声はあくまで情報伝達のもので、イメージに合う声を想像して頭の中で再生するとのことである。また、映像派の人は「太陽」が突飛な詩であるために、文中に登場するドルフィンはあくまで比喩で、川魚を子供が獲っている姿を想像したという。

普段、読書の感想を述べることはあっても、自分がどのような手段や感覚で読んでいるのか共有する機会は少ない。自分自身の経験を言葉にしてみることで、参加者たちは読書にも多様な見え方、聞こえ方があることを再確認していた。

プログラム後半では展示室に移動し、詩稿を実際に鑑賞したり、朗読を一緒に聞いたりすることで、その印象の変化を全員で味わった（図3）。また、その後には西脇の押し花帳や植物図鑑も鑑賞した。西脇展を担当した森山緑によれば、イヌノフグリやクソニンジンといった植物たちはしばしば詩の中に登場するが、西脇はその名前の響きに面白みを感じていたらしい*14。そのため、詩人は散歩の途中で植物を見つけては、その名前を知りたがっていたという。プログラム前半では、スマホで読書しながら検索するという話題で盛り上がったが、西脇も植物の名前をよく調べていたことが分かると、現代人と西脇が実は近しい発想を持っていたのかもしれないと参加者のなかで親近感が生まれている様子であった。

ワークショップ開始前、ほとんどの参加者は西脇順三郎のことを知らず、その詩に対しても難解な印象を持っていたが、今回、彼の詩作プロセスと各自の読書体験に共通点を発見し、詩人やその詩に少しでも近づくことができたようであった。

4. 準備過程の記録：散歩編に至るまで

「読書／詩を読む編」終了から「散歩編」まで準備期間があまり取れないため、その内容やルートの想定については

図3 「読書／詩を読む編」展示室内での鑑賞

11月時点から話し合いを始めていた。展示映像や写真にも登場する多摩川周辺はキャンパスのある三田からは遠く、芝公園や増上寺といった三田周辺の名所までは、交通量が多く植物の少ない大通りを歩かざるを得ない。以上を踏まえ、西脇が教師として長い時間を過ごし、詩やエッセイにも度々現れる三田キャンパス内で散策ルートを設定することにした。

当初は、現在の正門の位置から旧図書館前や飯田善國の彫刻《星への信号》（1984年）を経て、西脇ゆかりの地でもある「旧ノグチ・ルーム」内をとりあえずのゴールとするルートを想定していた。しかしながら、当該施設の補修工事のため、2月末から3月上旬に新ルートの候補をKUACスタッフで検討した。その結果、「旧ノグチ・ルーム」室内には入らず、イサム・ノグチの彫刻《無》（1950-51年）周辺をとりあえずのゴールとして設定することに決めた。また、「散歩編」で用いる詩の候補を選定するため、散歩や植物、三田といった要素が登場する詩やエッセイを収集し、「とつくる」メンバーへと共有した。

(1) 実施場所（三田キャンパス）下見

3月6日には「とつくる」林氏とともに詩の候補を選定しつつ、実際に三田キャンパスの下見を行った。まず、選ばれた詩「燈台へ行く道*15」に関連して「燈台（あるいは燈台のような象徴的なもの）」を探し、文中の詩人のようにそこに向かって歩いてみるという方針を決めていた。また、このワークショップには目の見えない人だけでなく、耳の聞こえない人も参加する。そのため、目だけでなく、耳で聞いて探す要素も取り入れたいということになった。春先の三田キャンパスでは、よく耳を澄ますと鳥の声が聞こえることから、「燈台へ行く道」の一節「小鳥の国」をキーワードとして設定することにした。

また、もう一つのキーワードとして、詩「正月三田*16」

から「三田の崖に［生えている］枸杞（クコ）」を取り上げることにした。現在のキャンパスには見られないが、注視しながら歩いてみると、小さな実をいくつか目にした。必ずしも枸杞でなくとも、足元の小さな植物を意識する目を作るという意図のもと、この一節が選ばれた。

以上、2作品の詩からキーワード3点を選んだが、これらに加えて、エッセイ「空白*17」も参加者へ事前に送付することになった。というのも、今回の散歩の指標をこの文章によって示すという意図があったからである。エッセイのなかでは、執筆することがなく困り果てた西脇が三田周辺を歩き、その周辺の道やそこで見つけたものについて綴っている。そして、この文章の最後には「空っぽの境地」あるいは「つまらないもの」、「平凡なもの」という言葉が登場する。こう語る西脇のように、頭を空っぽにして、普段は取るに足らないと思われているものに視線を向けてみるため、このエッセイを選定したのである。

プレ座談会では、目の見えない人は目的地を定めない散歩は難しいという話が出た。そのため、今回はこれらの詩やエッセイを手がかりに、よそ見をしながら散歩することを試みる。もちろん、ワークショップの時間や枠組みが決まっている以上、ルートはある程度定めざるを得ないが、出来るだけガイドツアーのような形式は避けたい。詩はひとつの手がかりとして、そこに登場しないものにも目を向け、全員で理想の散歩を作り上げるという目的を共有した。

11月時点で組み立てたルートでは当初、東門や図書館旧館前の広場周辺を通過することを想定していた。しかし、身体移動と対話を伴う今回のワークショップでは、大幅な時間超過がすでに予想されていた。そのため、植生豊かで歴史ある場所ではあるが、今回はルートから除外した。

また、散歩中には詩と無関係なものも探すとはいえ、西脇自身の散歩やその詩について思いを馳せる時間も確保したい。よって、今回はいくつかのチェックポイントをつくり、西脇や三田についての知識の提供を行うことにした。

例えば、西脇順三郎と飯田善國は兼ねてより友人で、多摩川辺りを散歩しては美術に関する議論を交していた。展示写真にも版画家・浜田知明とともに登場するほか*18、西脇が散歩する様子を記録していたのも飯田である*19。三田キャンパスの西側には飯田善國の彫刻《星への信号》が設置されているため、ここをひとつのチェックポイントとすることにした。

また、途中で通過する「三田演説館」（1875年）は、かつて塾監局や図書館旧館の隣に設置されており、エッセイ「四十年前の三田の山」のなかでもそのことが言及されている*20。そのため、ここでも立ち止まり、西脇がこの地へと向けた視線について触れることにした。

そして、最後は「旧ノグチ・ルーム」とイサム・ノグチ《無》の前である。この空間と彫刻はかつて、建築家・谷口吉郎が設計した第二研究室にあり（彫刻群は庭に設置）、西脇の研究室もここに存在していた。現在では南館に移設されたとはいえ、詩やエッセイに度々登場するこの場所は散歩の最終地点にふさわしいといえるだろう。

以上の経過を辿り、「散歩編」は次のようなルートに決定した。① KUAC前からスタートし、三田キャンパスの中央広場へ。②第一校舎と塾監局の間を抜けて飯田善國《星への信号》へ。解説ポイント1。③三田演説館（1875年）前へ。解説ポイント2。④演説館脇から階段を降り、南館へ。⑤南館3F「旧ノグチ・ルーム」前、イサム・ノグチ《無》周辺へ。解説ポイント3（とりあえずのゴール）。⑥中央広場周辺のテーブルで感想を共有し、解散。

(2) オンライン会議（Zoom）による事前打ち合わせ

3月6日の下見を経て、翌日にはオンラインで直前ミーティングを行った。ここでは、今回の趣旨「よそ見をしながら歩く、理想の散歩をつくる」を全員で共有し、ワークショップの構成やルートを確認した。

まず、今回選んだ詩やエッセイを全員で読んだうえで、西脇が散歩のなかで三田キャンパスをどのように捉えていたかを理解する時間を設けた。また、これらの詩とエッセイは事前配布するが、当日は熟読という形ではなく、キーポイントのみを簡潔に伝える方向で一致した。

さらに、ここでは当日の班分けについても改めて確認をした。基本的には見えるスタッフと見えないスタッフが二人一組となり、A班とB班に分かれる。しかしながら、2班は完全に別行動ではなく、つかず離れずの距離で同ルートを辿り、時たま合流した際にはお互いが発見したものを共有するという方法を取ることにした。対話しながらの鑑賞はどうしても輪が大きくなると難しくなる。当日は結局、参加者に加え、見えない人の同行者や手話通訳も対話に加わる。最初は大きな1班のみの想定であったが、スタッフが見守れる範囲で小さな2班に分割したのは、終わってみれば賢明な判断であった。

5. 当日の実施内容：散歩編［2023年3月11日（土）14：00–15：30］

「散歩編」当日、見えないスタッフとともに念入りなルート確認を行ったうえで、直前の変更もあった。先述の通り、「散歩編」のキーワードは「燈台」「三田の崖の枸杞」「小鳥の国」の3つであったが、「燈台」をキーワードから外すことになったのである。

そもそも「燈台」を選んだ理由は、なにか象徴として見立てて探しやすいのではないかというものだったが（《無》をとりあえずのゴールとしたのも「燈台」としての見立てがしやすいかと考えたためであった）、参加者が見立てに終始してしまう懸念が出た。また、参加者自身にも気になった詩の一節からなにかを発見してみてほしいということ、そして何より、今回の散歩はみんなで話しながらつくるもので、植物をはじめ様々な「よそ見」をしながら歩いてほしいということを考えるならば、わかりやすい「燈台」は無いほうが良いという結論に達したためである。結果的に、キーワードが減ったおかげでより自由に対話しながら散歩できていたのではないかと思う。

開始に際して、参加者に本ワークショップのテーマを伝えるとともに、「散歩編」のきっかけとなった言葉を生んだ、見えないスタッフから今回の散歩の趣旨の説明があった。参加者には詩とエッセイ3編を事前に読んでもらうようにお願いしてあり、当日はパワーポイントと口頭で2点のキーワードについての簡単な説明を行った。もちろん、これ以外からも気になったワードを手がかりに散歩することも良いとの補足があった。

本展では1階の展示室外の壁面に西脇の散歩映像を投影しているため、KUACでの自己紹介後、キャンパスへの移動途中で、散歩する西脇を観察して言葉にしてみることにした。すると、草野球が行われている野原で英国紳士のようなスーツを着ている西脇の姿からか、参加者からは、散歩の場所とその格好のアンバランスさに注目する感想が出た。

その後、2班に分かれて、現在の正門（南校舎方面）から散歩をスタートさせた。詩の中でも「竪琴のような枝ぶり」の描写があるからか、まず、中央広場では大銀杏に注目がいき、葉が落ちた樹の姿が毛細血管やアフロヘアーのように見えるとの声があがっていた。

また、飯田善國の彫刻近くで欅の樹に触れた際にはその皮が少しめくれてしまったが、ともに触っていた見えない人からは「かわいそうな小さな生命を驚かせてしまった」との一言がとっさに飛び出た。これは「燈台へ行く道」からの引用で、詩のなかの一節と散歩中の偶然の出来事がコネクトしたことが興味深かった。

もちろん、必ずしも詩と紐づかない小さな発見も積極的に共有し合った。通りすがりに咲いている赤い花を観察しながら、山茶花と椿の違いを話し、花壇に植えられた水仙の香りを一緒に確かめた。そして、ふとしたときに「小鳥の国」というワードを思い出し、鳥の声に耳を澄ませてみた。散歩の後半では、キーポイントとなる言葉を積極的に出さなくても、自由な散歩と対話が生まれていた（図4）。

また、B班は下見の際には見つけられなかった野ばらを見つけ、途中で合流したA班に咲いている場所を教えてくれた。「野ばら」は「読書/詩を読む編」で取り上げた詩のうちの1編「一月」に登場する象徴的な植物である。

「よそ見」をしながら散歩しているうちに、詩に登場する何かの見立てだけでなく、視線が様々なものへと向かっていったが、「野ばら」の発見のように歩いていく先でまた西脇と出会うことができたのである。それぞれのスピードで移動していたためか、2班の合流は想定より少なかったが、時たまこうした会話と発見の共有が起きていた。

時間が大幅に超過してしまったため、イサム・ノグチの彫刻の手前で感想を述べ、前回同様「詩のおみやげ」を配布し解散となった。この振り返りでは、参加者のひとりが今日のルートが想像よりもアップダウンが激しい道であったと述べていたことから、かつてのキャンパスの姿について補足を行った。慶應義塾大学は「丘」が象徴であり（西脇も本キャンパスを「三田の山」と呼んでいた）、昔は海が見えたそうなのである[*21]。参加者からも、西脇がここに来て海の音を聞いていたのかもしれないという感想が出た。

本ワークショップにおいては、西脇順三郎がかつて過ごした三田の地で、西脇の詩やエッセイとともに自分たちの散歩をした。かつて見えた海の話に象徴されるように、西脇がかつて見ていた景色と我々が今見ている景色が、散歩という身体運動や西脇の詩や言葉を介して繋がったような感覚があった。

6.「とつくる」メンバーとの振り返り

2023年5月、ワークショップ実施から2ヶ月ほどの時間が経ってしまったが、忙しい時間を縫って参加してくれた「とつくる」メンバーと、主に「散歩編」の内容について振り返ることができた。

図 4 「散歩編」散歩中の様子

(1) ルート設定について

まず、今回は一定のルートを設定したが、自由な散歩がどの程度実現できたか質問を行った。A 班ファシリテーターからは、行き先を大きく逸れることはできなかったとはいえ、それにこだわらず、寄り道もできていたのではないかとの回答があった。

また、B 班には植物に非常に詳しい参加者がいたため、木を見るだけで話が膨らみ、花や葉っぱも触るなどして盛り上がりを見せていたという。B 班は、スクラッチタイルや石垣といった建築要素にも強い関心を寄せていた A 班とは異なる動きをしていたようだ。

また、B 班ファシリテーターは、映像内にあった鬱蒼とした草むらをかきわけ散歩する西脇と、急な坂もどんどん下っていく参加者の様子を重ね合わせていた。今回のルート設定により、想像以上にワイルドな散歩となったことで、詩人のマインドに近づくことができたことが嬉しいとの感想もあった。

今回のワークショップではただ散歩するだけではなく、西脇の詩を中心に据えたからこそ、自然と植物へと目を向けることができていただろう。実際、途中では、詩人の友人で散歩をともにしていた飯田善國の彫刻付近や、エッセイ中にも登場する演説館といった西脇ゆかりの場所を、チェックポイントとしてルートに盛り込んだ。この工夫によって、それぞれの話題に花を咲かせながらも、西脇が日々歩いていた三田へとどのような視線を向けていたか、一定の間隔で振り返ることが可能となった。

(2) 選定した詩、エッセイについて

今回は詩やエッセイを事前配布したが、その後の対話が上手くいったのはこのことも要因のひとつとして挙げられるだろう。林氏によれば、当日いきなり詩と向き合うという方法には良い面もあるが、ワークショップの限られた時間内では表層の部分だけを味わい終わってしまうこともあるいう。実際、「読書 / 詩を読む編」の参加者たちは当初、西脇の詩に難解な印象を抱いていたようであった。事前配布の際のメールでは、無理に読まなくても良いという旨も伝えることにしていたこともあり、詩に対するハードルが低くなり、ある程度の安心感は得られていたようである。

また、「散歩編」の実施中には、参加者があらかじめ選定した詩やエッセイの存在を強く意識していたわけではないものの、むしろ丁度良い塩梅であったという意見が出た。

なお、今回は西脇の詩に初めて触れる人から深く熟知している人まで、様々なレベルの参加者がいたが、構内の散歩や植物観察を介することで、全員が一緒に話すことができていた印象があった。

「とつくる」はその名の通り、普段、視覚障害者とつくる「美術鑑賞」ワークショップを行っている団体である。「とつくる」にとっても、今回のような詩と散歩を結びつけたワークショップを行うのは初めての試みであったそうだ。しかしながら、みんなの言葉を集めて詩をつくってみたり、観光地をぶらぶら歩いて偶然の発見を探してみたりと、断片的な要素はこれまでの企画にも自然と含まれていたものである。今回の実施は「とつくる」にとっても、新たな挑戦の機会になったとの言葉を貰うことができた。

以上、KUAC 側の運営面については、反省点や課題が明らかになった一方、「とつくる」と協働して実施した内容面については、これからの新たなワークショップに向けてひとつの参考事例となったことは確かである。

7. 課題と展望

以上のように、「読書／詩を読む編」、「散歩編」は長期間の準備段階を経て、無事に終了した。事後アンケートでも概ね満足したとの声が多く、成功裏に終わったともいえる。しかしながら、今回の実施までの過程では課題も見えてきた。そのため、最後に本節では、本ワークショップの課題を取り上げ、整理してみたい。

(1) KUAC における今後の課題

1. スケジュール設定

東京海洋大学 WS といった別プロジェクトのプログラムも含めると、2023 年 2 月から 3 月の間に、合計 4 つのプログラムを実施したことになる。インクルーシヴ鑑賞ワーク

ショップのKUAC開催は初めてで、特に「散歩編」ではキャンパス内を散歩するというアクティビティも実施するため、運営面でも慎重に検討や確認すべき事項が多かった。それにもかかわらず、特に実施直前の1月から3月にかけて、かなりの過密日程になってしまったことは大きな反省点である。

また、先述の通り、事前打ち合わせの段階では1時間半のプログラムを想定していた。しかしながら、こうした対話型鑑賞ワークショップの時間設定として明らかに短すぎることがシミュレーションの段階で露呈した。そもそも、対話を中心としたプログラムは必然的に冗長になる傾向がある。それに加え、手話通訳や移動にかかる時間も考慮に入れなければならない。

事後アンケートにおいても、参加者からは「もっと長くてもよかった。むしろその方がありがたい」と感じたとの回答があった。もちろん、プログラムの時間が超過しないように、ファシリテーター役によるコントロールがある程度必要ではあるが、基本的には余裕を持った時間設定をすることが望ましいだろう。

そして、こうした運営面での最適な枠組みを決定するためには、1つ1つのプログラムにしっかりと向き合い、話し合うだけの時間が必要である。

2. 情報発信

西脇展でインクルーシヴ鑑賞ワークショップを実施することは、半年以上前から決定していた。また、西脇展自体の1月開幕も以前から決まっており、年末年始を挟むことで設営、カタログ制作に向けて早めの事前準備が必要となることも分かっていたことだ。にもかかわらず、KUACスタッフは別件のプログラムや展覧会にかかりきりとなり、西脇展WSの事前準備は後手に回ってしまっていた。

そのため、ワークショップの日程の告知自体は12月頃発表されたプレスリリースやチラシにも盛り込んだが、そこでは詳細を出すことができなかった。ワークショップの簡単な概要をウェブサイトおよびSNSに掲載できたのは1月中旬頃である。

こうした事前の情報周知の不足もあってか、「読書／詩を読む編」の募集にあたっては、見えない人や見えにくい人からの応募が非常に少なかった。そもそも、今日、同時代の詩人と比較すると西脇は高い知名度があるわけではなく、その詩も難解で解釈が難しい印象があることも否めない。「読書／詩を読む編」の事後アンケートによる回答を見ても「とつくる」のSNSから本イベントを知った人が最多で、次いでフリーペーパーといった別経路から知ったという人もいたが、KUACのSNSと答えた人はおらず、情報の周知に課題が見られた。

一方で、「散歩編」についてはむしろ、参加者募集開始時（1月）から少し先となる3月開催であることや三田キャンパス内の散歩という要素を含むためか、想定以上の応募があった。もちろん、本来であれば、より多くの人にワークショップに参加してもらいたい。しかしながら、インクルーシヴ鑑賞ワークショップを実施するうえで、このような移動を含む、あるいは移動そのものが中心となる試みは初めてで、KUACのような小規模な組織で用意できるスタッフの人数や、ルート設定、不測の事態が起きた場合を考えると、今回は抽選を行い、ある程度参加者の人数を絞らざるを得なかった。

3. 申し込みフォーム設定、ウェブサイト

先述の通り、今回申し込みフォームについてはGoogleフォームを使用した。しかしながら、実際のところ、今回用いたGoogleフォームでも上手く入力できない参加者が見受けられた。目の見えない人、見えにくい人にとっては、申し込みページの複雑さが参加のハードルになってしまうこともあり、メールやファックス、電話と様々な手段を用意すべきである。展覧会Webページには電話番号とファックス番号を掲載していたものの、フォーム同様に質問項目を丁寧に書いておくべきであった。

また、KUACウェブサイトについても、スクリーンリーダーのような画面読み上げソフトの使用に最適化されておらず、大変使い勝手が悪く、情報を取得しづらいという課題が改めて浮かび上がった。今後の継続的なワークショップ実施のためには、こうしたウェブサイトの整備も求められるだろう。

4. 事前ヒアリングの必要性

スケジュール設定の問題とも重なるが、今回は、ワークショップ実施前に障害当事者や同様の取り組みを行っている他のミュージアムへのヒアリングをほとんど行うことができていなかった。そもそも、これまでインクルーシヴな試みを率先して行ってきたわけではないKUACでは、アクセシビリティの観点から施設設備や導線に大きな課題があると感じた。

2月には「インクルーシヴを語る会」と題し、増上寺で港区の文化・宗教施設におけるアクセシビリティについて意見

を交換する勉強会を開いたが、日程的には西脇展 WS の直前となってしまっていた。

視覚障害や聴覚障害といった様々な種類の障害のある人々とともに作品鑑賞、対話を行うのがインクルーシヴ鑑賞ワークショップである。その実施にあたっては、当事者の声に真摯に耳を傾けること、アクセシビリティやプログラム実施について継続的に調査・検討を進めることが必要である。

このことに関連し、打ち合わせの過程では「とつくる」側からの重要な指摘もあった。当初の進行表では 2 人の手話通訳は耳の聞こえない参加者に同伴するような形で記されていた。しかしながら、彼らは耳が聞こえない人のためだけにいるのではなく、耳の聞こえる我々にとっても手話通訳が必要なのである。こうした認識を忘れてはいけないという。全体の準備に気を取られるとこうした細やかな部分を見落としがちだが、当事者に向き合う姿勢や言葉の使い方は常に意識していなければならない。

その点では、「とつくる」メンバーと行ったプレ座談会は充実した内容となった。これは、KUAC と「とつくる」双方のアイスブレイクの場となっただけではない。見える人と見えない人が互いに自身の経験も共有しながら、普段はどのように本を読み、買い物し、歩いているのか。些細なようで、重要な生活の体験について知る貴重な機会でもあった。今後も、このようなスタッフ間の情報共有の場、プレ・ワークショップの機会は積極的に設けるべきであると提言したい。

以上、今回のワークショップの実施については多数の反省と課題が残されていることが明らかである。一方で事後アンケートの結果では、ほとんどの参加者が「大変よかった」と回答しており、概ね満足という結果が得られたことも事実である。アンケートには、今後も同様の取り組みを希望する声が多数寄せられていた。

「散歩編」では植物だけでなく、建築に強い関心を寄せていた参加者もいることから、三田キャンパスの歴史的建造物を題材にしたインクルーシヴ鑑賞ワークショップなど、今後の展開についても様々な可能性があるだろう。筆者は現在 KUAC 所属ではないものの、本年度の課題とノウハウを活かし、継続的にこうしたプログラムを実施していくことを期待したい。

おわりに

ワークショップの事例報告では、その本番の実施内容が重要視されがちである。しかしながら、実施例が多いとはいえないインクルーシヴ鑑賞ワークショップの場合には、その準備過程の記録にも一定以上の必要性があるとみて良いだろう。

実際、今回は準備段階の対話を通して、新たな発見や課題が多く見つかった。特にプレ座談会では、歌舞伎揚や野球中継、図書館で借りた本の話など小さな日常の話を聞いている時が楽しく、同時に新たな気づきがあった。例えば、見えない人が家にたくさんあるからと配ってくれた歌舞伎揚から、見えない人たちの買い物と散歩の話に発展した。というのも、見えない人にとっては、散歩や買い物には準備が必要で（もちろん、気軽に出掛けることのできる見えない人もいるので個別の事例ではあるが）、好きな時に出掛けて必要な量だけものを買うことが難しいそうだ。だから、彼の家にはネットスーパーで大量購入した歌舞伎揚が置いてあったのである。このように、ただ楽しく話しているだけではなく、こうした日常の「おしゃべり」や「寄り道」のなかにふとした重要な課題の発見があるのだ。

それゆえに、筆者にとっては、今回のワークショップへと辿り着くプロセスそのものが、「寄り道をする散歩」のようであり、非常に大きな意味を持っていたと思えてならないのである[*22]。今回のワークショップの課題や反省、発見を胸に、「おしゃべり」や「寄り道」を続けながら、今後もインクルーシヴ鑑賞ワークショップの機会創出に努めていきたい。そして、本論考がこれからインクルーシヴ鑑賞ワークショップを企画・実施する際の一助となれば幸いである。

註

＊1　アート・アーカイヴ資料展 XXIV：西脇順三郎没後 40 年記念展「フローラの旅」http://www.art-c.keio.ac.jp/news-events/event-archive/artarchive24/（最終閲覧：2023 年 5 月 5 日）

＊2　「マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ＆ぶらぶら対話ツアー」http://www.art-c.keio.ac.jp/news-events/event-archive/20230204_tour/（最終閲覧：2023 年 5 月 5 日）

＊3　「インクルーシヴを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える」http://www.art-c.keio.ac.jp/news-events/event-archive/20230216_talk/（最終閲覧：2023 年 5 月 5 日）

＊4　活動報告については、全体報告書を参照。森山緑「アクセシビリティ・イノベーション・ワークショップ」『都市のカルチュラル・ナラティヴ 2022』「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト実行委員会、2023 年、4-7

頁。

＊5　日本における、視覚障害者とともに行う美術鑑賞の取り組みについては、下記の文献を参照。伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社、2015年。

＊6　なお本稿では、ワークショップ実施時の呼称に則り、視覚障害者を「目の見えない人」あるいは「見えにくい人」、聴覚障害者を「耳の聞こえない人」あるいは「聞こえにくい人」と記述することにする。また、「障害」の表記については、障害の社会モデル（障害は社会や環境の側にあるという考え方）に基づき、漢字での表記に統一する。

＊7　chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/shogaisha_yushiki/02/pdf/r1412263_08.pdf（最終閲覧：2023年5月5日）
https://artscape.jp/focus/10156072_1635.html（最終閲覧：2023年5月5日）
武内厚子「偶然と才気によってさがしてもいなかったものを発見する――セレンディピティ」『TOP コレクション セレンディピティ――日常のなかの予期せぬ素敵な発見』公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、2023年、111頁。

＊8　本プログラムは、令和3年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業「更新される都市文化：地域文化機関の連携に基づく文化とコミュニティの持続的成長モデル形成事業」の一環として実施された。
（http://www.art-c.keio.ac.jp/research/research-projects/cunary/）2023年5月6日最終閲覧。

＊9　このプログラムの記録については以下を参照。『「みる誕生」鑑賞会報告書』細谷芳（企画）、江藤祐子ほか（執筆）、公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館、2022年。

＊10　「新・今日の作家展2022 世界をとりとめる」、2022年9月17日（土）～10月10日（月・祝）、横浜市民ギャラリー。
https://ycag.yafjp.org/exhibition/new_artists_today_2022/（最終閲覧：2023年5月5日）

＊11　「私の道は九月の正午／紫の畑につきた／人間の生涯は／茄子のふくらみに写つている／すべての変化は／茄子から茄子へ移るだけだ／空間も時間もすべて／茄子の上に白く写るだけだ／アポロンよ／ネムノキよ／人糞よ／われわれの神話は／茄子の皮の上を／横切る神々の／笑いだ」西脇順三郎「茄子」『定本 西脇順三郎全集』筑摩書房、1993年、第2巻、341-342頁。

＊12　「坊主の季節が来た／水仙の香りを発見したのは／どこの坊主か。／美しいものは裸の女神よりも／裸の樹の曲り方だ。／黒い土に結ぶ水晶と根の季節だ。／黄色い竹藪から手を出して／つる草の実の宝石を取る男がいる。／こわれた竪琴のような樫の木が／一本みどりの髪をたらしている。／淋しい春を奏でる蜂も女もいない／まだ人間は野ばらの中にしやがんで考えているのだ。」西脇順三郎「一月」同書、第1巻、368頁。

＊13　「カルモヂインの田舎は大理石の産地で／其処で私は夏をすごしたことがあった。／ヒバリもゐないし、蛇も出ない。／ただ青いスモヽの藪から太陽が出て／またスモヽの藪へ沈む。／少年は小川でドルフィンを捉へて笑つた。」西脇順三郎「太陽」同書、第1巻、9頁。

＊14　森山緑「西脇順三郎の『空っぽの境地』――ただ歩き、フローラを見つめて」『アート・アーカイヴ資料展XXIV：西脇順三郎没後40年記念展「フローラの旅」』慶應義塾大学アート・センター、2023年、17-18頁。

＊15　「まだ夏が終らない／燈台へ行く道／岩の上に椎の木の黒ずんだ枝や／いろいろの人間や／小鳥の国を考えたり／「海の老人」が人の肩車にのつて／木の実の酒を飲んでいる話や／キリストの伝記を書いたルナンという学者が／少年の時みた「麻たたき」の話など／いろいろな人間がいつたことを／考えながら歩いた／やぶの中を「たしかにあるにちがいない」と思つて／のぞいてみると／あの毒々しいつゆくさの青い色もまだあつた／あかのまんまの力も弱つていた／岩山をつきぬけたトンネルの道へはいる前／「とべら」という木が枝を崖からたらしていたのを／実のついた小枝の先を折つて／そのみどり色の梅のような固い実を割つてみた／ペルシャのじゆうたんのように赤い／種子がたくさん、心のところにひそんでいた／暗いところに幸福に住んでいた／かわいゝ生命をおどろかしたことは／たいへん気の毒に思つた／そんなさびしい自然の秘密をあばくものでない／その暗いところにいつまでも／かくれていたかつたのだろう／人間や岩や植物のことを考えながら／また燈台への道を歩きだした」西脇順三郎「燈台へ行く道」前掲書、第1巻、414-415頁。

＊16　「眼だけ残つている。／考えることも感じたりすることも／危険な海の限界線である。／友人からもらつた梅に白い花が／咲きかけたこの暗い室で。／この山の上で人生を終ることは／情ないことだがしかたがない。／菜根譚ももう僕には必要がない。／三田の崖に枸杞が栄えてい

る。／あのほそながい赤い実は酒をくもらす。／年中その葉をサラダにして口をまげて／たべているだけだ。／焼けあとにとりのこされた樫の木は／竪琴のように枝をまげている。／でもあの木だけは切らないで下さい。／秋になつたら芝生にオギヨーという草／が一面に小さい頭を出して来た／これも刈らないで下さいな。／これは春の七草の一つだ／うない乙女の籠を飾るのだから。」西脇順三郎「正月三田」同書、第2巻、9–10頁。

＊17 「書くことがないということはつらいことだ。恐らくこれが随筆の存在する始めであろう。［中略］二、三日書くことがないかないかと頭をなやましながら三田の山へ朝歩いて行き、帰りも歩いてみたが、どうしてもだめだ。どういう理由か、歩きながら考えたら面白いことが心に浮ぶかと思ったが。昔鴎外先生は三田へ講義に来る時馬に乗って来たという話だが、恐らく講義なら、馬に乗って来た方が有益だろう。

三田の山へあがる方法に二つの道がある。一つは裏門と一つは三田通りからあがる所謂正門というやつである。［中略］

しかし何も書くことはない。考えることもない。眼にうつるものを描くほかない。思索も思想も宗教も教訓も人生哲学も排除した、空っぽの境地をみつけるのが私が好む随筆の面白味である。だから随筆がむずかしいことになる。出来るだけ、つまらないもの、出来るだけ平凡なもの、殆ど思索的にゼロなものを求めるからである。しかし一般に考えられている随筆の伝統は宗教あり、教訓あり、人生論があるものである。」
西脇順三郎「空白」『メモリとヴィジョン』研究社出版、1956年、158–159頁。

＊18 撮影：川辺信一［西脇肖像、散歩写真］1965年

＊19 撮影：飯田善國《ある日の西脇順三郎 一九七六・九月十九日》1976年、8ミリフィルム

＊20 「三田の山の上の植物界にも昔ものがたりがある。昔は演説館が塾監局とならんであった。」西脇順三郎「四十年前の三田の山」『メモリとヴィジョン』研究社出版、1956年、211–214頁。

＊21 エッセイ「美しかった慶應義塾のキャンパス」内でも、かつてはこの地から海が見えたことに西脇も言及している。「三田の山へあがると、昔は松の木の並木みたいなものがあって、そこから海の青味が見えた。この景色もやがてなくなった。私が予科の一年の時かと思うが、芝浦の「うめたて地」が一部出来上ったからだ。」「美しかった慶應義塾のキャンパス」『あざみの衣』講談社文芸文庫、1991年、46–48頁。

＊22 なお、今回のプロジェクトに関連して、インターン生の福田真子（当時）と学生・運営の視点を通してプログラムを振り返るZINEを制作した。吉岡萌・福田真子「私たちが見てきいて話したインクルーシヴ鑑賞ワークショップの記録」、慶應義塾大学アート・センター、2023年。

また、こちらは現在、ウェブサイトにてPDFとテキストデータの2種類を公開している。
http://www.art-c.keio.ac.jp/publication/reports-programs/culnarra-zine-23/